

# 令和5年度実践研究奨励援助事業実施校 研究主題等一覧

## ■学校課題研究

※校長・園長名は令和6年度

No.	学校名・園名	校長・園長	代表研究者	研究主題
1	鹿沼市立上南摩小学校	伊藤 洋二	同左	児童に役立つ防災教育の実際について ～防災教育年間活動の見直しと検証～
2	日光市立落合東小学校	清水 仁美	同左	主体的に学び、確かな学力を身に付ける児童を育む授業づくり～対話的な学びの充実を目指して～
3	日光市立落合西小学校	湯澤 敦子	同左	考える教職員集団を育む学校の組織づくり ～ちいさな学校のコンパクトな組織の在り方～
4	日光市立中宮祠小学校	川田 正己	同左	教科の特性を生かし、根拠に基づいて課題を解決する力を高める指導法の工夫 ～極小規模校の特性を生かして～
5	小山市立中小学校	輕部 泰司	同左	主体的に学習に取り組み、考えを深めようとする子どもの育成 ～子どもが主体的に考え、対話によってよりよい生き方を探っていく道徳授業を目指して～
6	栃木市立栃木第三小学校	塩田 裕子	同左	人を繋ぎ、地域を繋ぎ、伝統を繋ぐ学校づくり ～未来へ地域の歴史や文化を継承する児童の育成～
7	那須町立那須中学校	戸村 一郎	同左	自律的に学ぶ力の育成 ～シラバスを使っての振り返りとフォーサイト手帳の取組～
8	栃木県立足利特別支援学校	遠藤 洋	同左	明るく、居心地のよい図書室を目指して ～特別支援学校における 児童生徒が主体的に本に親しむ環境づくりと わくわくするような読書活動への取組～

**研究主題 児童に役立つ防災教育の実際について～防災教育年間活動の見直しと検証～****学校または園名 鹿沼市立上南摩小学校****校長または園長名 伊藤 洋二****1 研究目的**

近年、地震等の災害が増加している。毎年、避難訓練等を実施しているが、保護者や地域とも連携し、学校内における防災教育を再度見直すことで、児童が防災について関心をもち、的確な判断の下、自らの安全を確保するための行動が取れるようにならう。さらに、災害発生時及び事後に児童が進んで地域の安全に役立つことができるような態度を育みたいと考えた。

**2 研究内容**

この研究のきっかけとなった「防災教室」を9月1日（防災の日）に実施した。2部構成とし、第1部は、まず「防災とは何か」をテーマに防災グッズの紹介や、被災した時に何がどれくらい必要になるか、などについてクイズ形式で学んだ。そして「大きな被害を経験した方のお話」として、実際の体験について映像も交え学生の話を聞いた。「これまでの身近な災害について」では、自分たちの住むこの地域でも被害は起きていることを知った。ハザードマップから、この地域も土砂災害特別警戒区域内であることを知り、引き渡し訓練の必要性も理解することができた。



被災者の体験談



防災グッズ手作り体験

第2部は、実際に被災した際に役立ちそうな防災グッズを学生さんに紹介してもらい、自分たちも作って持ち帰った。それらを話題に家族で防災について話し合うことができた児童もいた様子で、有意義な活動となつた。

本校は目の前に山があり「急傾斜警戒区域」にかかるため、本校体育館ではなく近くの自治公民館へ避難することになる。そこで例年、保護者の協力を得て「引き渡し訓練」の実施訓練を行ってきた。引き渡し訓練の実施時期や実施時間など毎回見直してきた。自治会とも連携し

地域住民も含めた防災訓練なども提案したかったが、十分な計画が立てられなかつた。

本校には、防災教育を含む安全教育として「安全安心かみなんま」を安全安心対策委員会の活動の一つとして実施している。児童と教職員が通学路と一緒に歩き危険箇所点検をしたり、地域安全マップを作成したりすることで、常に地域の方々に見守られていることや、防犯・防災意識を高めることができた。さらに、教職員の安全点検の他に、児童による安全点検も実施し、危険箇所を意識することもできた。

**3 研究成果**

○児童らは、実際に被災経験者のお話を聞けたことで災害を身近に感じることができた。また、自宅近辺（学校）が「土砂災害特別警戒区域内」であることをハザードマップで確認でき、防災に対する意識が高まつた。元旦に、能登半島地震が起きその報道などから、「東日本大震災」を知らない児童たちも被災の実際を目の当たりにし、防災教室で学んだことを改めて理解することができた。また、防災教育活動を含む「危機管理マニュアル」に関しては例年、現職教育において全職員で確認する機会を持っているが、より一層教職員の意識も高まつたと思われる。

**4 今後の課題**

毎年行われてきた防災教室の内容が挙げられる。例年通りでは有意義なものにならない。講師の選定や内容などの検討が必要である。さらに、どのようにすると保護者や地域の方々、地区内の中学校との連携がスムーズにいくか、である。本校は12世帯の極小規模校だが学区は広い。地区的世帯数は300以上にもなる。しかし高齢者が多く、学校だけでは開催は困難である。地域と連携した、自治会と学校主体の防災教室の取り組みが実施できたら、有事にも生かされる、真に有意義な活動になるものと考える。

研究主題　主体的に学び、確かな学力を身に付ける児童を育む授業づくり  
～対話的な学びの充実を目指して～

学校または園名　日光市立落合東小学校

校長または園長名　清水 仁美

### 1 研究目的

対話的な学びを重視した教科ならではの学び、教科横断的な学びを視点にした授業改善を通して、本校で育てたい5つの資質・能力である「主体性(やり切る力)」「コミュニケーション力(読解力)」「情報活用力(判断力)」「問題解決力(判断力)」「自己肯定感」を主体的に身に付ける児童を育成する。

### 2 研究内容

学校評価や学力調査等の分析結果をもとに現状を把握し、「コミュニケーション力」「情報活用力」「問題解決力」を観点とした授業改善策を検討した。

学校評価や学力調査等の分析結果をもとに指導の成果と課題を把握し、授業改善策を再検討した。

令和5年度の研究の成果と課題を振り返り、次年度に重点的に取り組む課題を設定した。

令和6年度研究推進計画を共有し、本校における「日光市授業づくり推進プラン」を策定した。

研究の成果と課題をまとめ、今後の授業改善策を検討した。

### 3 研究成果

本校で育てたい5つの資質・能力に迫るために研究授業を実施し、教職員の意識・授業力の向上を図ることができた。また、児童自らがどのような力を身に付けることができたのか振り返ることができるよう、視点を明確にした振り返りカードを活用し、その結果を踏まえよりよい授業実践に努めることができた。

更に、市の学力調査の結果から、国語における「話す・聞く」力の伸びが見られるなど、育てたい資質・能力の向上が見られた。

### 4 今後の課題

必要な情報を正しく読み取ることができず、正しい判断に至らないケースも見られるなど、育てたい資質・能力のうち更なる取組が必要な項目も見て取れる。「主体性(やり切る力)」や「コミュニケーション力(読解力)」等の能力も複合的に活用した取組が必要であると捉えており、振り返りカードやアンケート等も活用しながら、よりよい授業実践や職員研修の充実等に努め、研究主題に迫る取組を継続していきたい。



【授業実践の様子】

**研究主題 考える教職員集団を育む学校の組織づくり  
～ちいさな学校のコンパクトな組織の在り方～**

**学校または園名　日光市立落合西小学校**

**校長または園長名　湯澤　敦子**

### 1 研究目的

学校経営方針を踏まえた学校教育活動の実現のために全教職員が参画できる小規模校のよさを生かした組織づくりを以下の2観点から進めていく。

- ①小規模校における部会の持ち方と校務分掌の見直し（組織の改編）
- ②学校経営方針を踏まえた教育活動時の実現に向けた会議の持ち方（組織の活用）

### 2 研究内容

#### (1) 基礎研究と本校の学校組織の課題

基礎研究として、小規模校の学校組織のメリット・デメリットについて整理した。また、業務改善の視点から学校組織の在り方についての調査を行った。それらを踏まえ、本校の現状における課題を洗い出した。大きな課題としては、合意形成が図りやすいよさがあるが、日々の業務に追われたり、担当する校務分掌の多さから前年踏襲になったり、ねらいやどのような子供に育てたいのかなどの検討が十分できないことがあげられる。

#### (2) 三部会の設定

学校組織に「知」「徳」「体」の三部会を設定し、学校経営の重点化構想にも位置付けるようにした。令和6年度は、会議の時間も位置づけた。各部会にリーダーとサブリーダーを決め、会議内容について検討し、提案できるようにした。主な学校行事については、三部会を活用して話し合いを進めることで、行事の目的や児童に育てたい資質・能力のとらえ方などについて検討することができるようになった。また、リーダーの進め方や協議中の各教職員の姿は、それぞれのよいモデルとなることが多く、教職員の資質・能力の向上にもつながった。

#### (3) 学校組織の改編と校務分掌の見直し

三部会を基にした学校組織の改編をした。それに伴い、校務分掌も見直しを図った。それまでは、各担当が計画立案していたことが、皆の協議の上、計画を立てられることになり、前年踏襲ではない、教職員の創意によるものが出くるようになった。また、どのような力を育てたいのか話題になる様子も見られた。

#### (4) 令和6年度の取組の一例

本校の特色の一つである「小さな学校」のよさとして、異学年交流が盛んなことである。今年度は、ひいらぎ班（縦割り班）を活かした教育活動を進めている。「徳部会」で話し合った、新入生歓迎会は、全校で校外学習をすることになった。準備の話し合いや実施の際に、子供が主体的に取り組み、互いに交流する姿が多くみられ、子供たちに任せることのよさを感じ、教職員も手ごたえを感じる行事となった。

### 3 研究成果

○基礎研究において、小規模校にあった学校組織の在り方を検討し、カリキュラムマネジメントや業務改善の観点から学校組織を見直すことができた。

○三部会の設置により次の点が改善されつつある。

①各部会で教育活動の実現に向けて、どのような取組を行っていったらよいのか全員の協議の上、決めることができるようにになった。

②三部会を設定することにより、個々の担当が業務を抱えるのではなく、全員での協議のもと計画等を作成する機会を設けることができた。

③三部会の話し合いの際に、「児童の育てたい資質・能力」を意識し、学校経営方針を踏まえた教育活動が行えるようになってきている。

④小規模校の課題である「教職員が学ぶ機会」が、リーダーを中心とした話し合いの実施により、各教職員の資質・能力の向上が期待できる。

### 4 今後の課題

○三部会の運営の仕方

・三部会を設置し、会議の日時の設定もしているが、何を話し合うのか、何のために話し合うのかをさらに教職員が理解し、各自が主体的に取り組める組織運営を進めていく必要がある。

○校務分掌の見直し

・三部会の話し合いを見据えて、校務分掌の見直しを図った。今後、教育計画の見直しや運営の仕方を改善していくことで、学校経営方針の具現化や業務改善につながることが期待できると考える。

**研究主題** 「教科の特性を生かし、根拠に基づいて課題を解決する力を高める指導法の工夫」～極小規模校の特性を生かして～

**学校または園名** 日光市立中宮祠小学校

**校長または園長名** 川田 正己

### 1 研究目的

本校は、全校児童12名の極小規模校である。複式学級ではあるが、併設の中学校とも連携しながら、単学年での教科担任制で学習指導を開いている。特に個別支援の充実を図りながら、各教科で、思考力・判断力・表現力の育成の研究に取り組み、教員の意識改革、全校体制で取り組むシステム作りを進めてきた。児童には、自分自身の考えを持ち、主体的に課題に取り組み、解決しようとする素地が培われてきている。これまでの成果を基盤として、主体的に深く学ぶ児童のさらなる育成を図ると同時に、各教科の特性を生かして互いの教科で培われた力が相互に発揮されることで、本校の教育目標である「夢や希望を持ち、主体的に学習する子」に迫っていきたいと考えた。

### 2 研究内容

- (1) 各教科の特性に応じた根拠に基づいて課題を解決する力を高める指導法の研究
- (2) 極小規模校の特性に応じた思考力・判断力・表現力の育成についての研究
- (3) I C Tを活用した他校との交流学習の推進
- (4) 教師と児童との適切な関わり方を意識した授業の実践
- (5) ねらいを意識した授業のまとめや振り返りの工夫

### 3 研究の実際

- ・教科グループによる相互授業参観、授業研究、授業改善
- ・定期的な授業研究会の実施
- ・第20回関東甲信越へき地教育研究大会茨城

大会への参加(R5.11/9・10)

- ・宇都宮大学附属小学校の先生をお招きしての模擬授業、研修会の実施
- ・東京都市大学杉浦正吾教授をお招きしての講演会
- ・成果と課題にもとづいた、各教科へのフィードバック

### 3 研究成果

- 課題（ねらい）解決に向けた主体的な取組が各教科で見られ、生活に密着した課題・実践が充実し、根拠に基づいた思考・判断・表現や「聞くこと・話すこと」の指導の充実も図られた。
- 自分の考えを的確に表現できるように、各教科で指導を継続し、自分の考えをもち、根拠に基づいた文章を書くことができた。
- ICTの活用により、他校との交流学習などを通して、コミュニケーション能力や情報活用能力、企画調整力の伸長が見られた。
- 教職員一人一人が、自分の教科や分野で実践に取り組み、その成果を共有することで、研究の質が深まった。

### 4 今後の課題

極小規模校、小中併設校の強みを生かしながら、思考力・判断力・表現力の育成に継続して取り組み、自分の考えをもち、豊かで的確に表現し合う活動を通して、今後も主体的に深く学ぶ児童の育成を図っていきたい。また、各教科で培われた力が、総合的な学習の時間や特別活動等の場面で統合的な力として発揮されるように、教科横断的なカリキュラムマネジメントにも取り組んでいきたい。

**研究主題** 主体的に学習に取り組み、考えを深めようとする子どもの育成  
～子どもが主体的に考え、対話によって  
よりよい生き方を探っていく道徳授業を目指して～

**学校名** 小山市立中小学校  
**校長名** 軽部 泰司

## 1 研究目的

令和6年度に本校が栃木小教研道徳部会下都賀大会の研究大会を実施するにあたり、令和5年度から、事前準備としての研究を全校体制で進めていく。学級担任6名全員の道徳科授業力の向上を図ることを研究の目的とし、令和6年度の研究の充実につなげていく。約2年間の継続した研究によって得られるであろう道徳科授業力の向上を全校体制で確認しながら、小規模校におけるOJTを中心とした学校体制づくりとしてまとめていくこととすることにより、研究の継続化も併せて図っていくこととしたい。

## 2 研究内容

### (1) 道徳開きに関する研修

春休み中の4月4日に道徳開きに対する考え方や方法等について、中山先生に講話をしていただくことで、道徳授業で大切にしたい考え方を児童と教師自身が共有し、共に「つくる」授業への一歩とすることことができた。

### (2) 授業からの学び

1学期中に1人1授業を低・中・高ブロックで見せ合いながら実施した。その際、中山先生に授業を観ていただき、放課後のOJTにも参加していただいた。30分間で気づいたことや疑問点を出し合いながら 考えを整理し合うことに努めた。

### (3) 中山先生による提案授業と講話からの学び

児童の思いを生かしながら授業を進める授業スタイルについて実際の授業（2年 あさも ひるも よるも あそびたい）から学ばせていただき、「児童の発言をつなぐ教師のコーディネートについて～本校が、意識して取り組む課題について～」の演題で講話をいただいた。参加したすべての教師から具体的な質問が次々に出された。研究が日常化されていること、研究発表がゴールではなく「通過点」として実践していることの表れである。

## (4) 授業づくり研修

- ①1人の人間として教材を読む  
教材の見方を広げることにつながった。
- ②内容項目の理解  
解説書に書かれている内容を教師自身がどのように捉えるかを話し合った。
- ③教師としての指導感  
何を考えたいのか（人間のよさは？）

## 3 研究成果

児童の考えを生かした、児童と共に「つくる」授業を全員が強く意識した実践を積み重ねていくことができた。そのことが、児童の振り返りなどから、児童が考えたい、知りたい、自己を見つめようとする思いにつながり、教師や仲間の意見を聞き、考えを深めていこうとする意欲につながっていることが確認できた。

また、小規模校におけるOJTの日常化を道徳科で推進できることは、学び合う教職員集団意識の醸成が図られるとともに、教職員の風通しがよくなってきた。今後は、道徳科だけではなく、他教科においても、OJTでの日常的な研修として応用していくことが期待できる。

## 4 今後の課題

授業づくりにおいて、みんなで教材を読んで感想や気になる登場人物の行為などを自由に出し合ったことは、教材の見方を広げることにつながった。その中で、注目したい行為やその行為のもとになっている心について話し合ったことは教師の経験年数に限らず効果的であった。今後は、全体で時間を取らなくても日常的な会話の中で当たり前のようにできるようにしていきたい。また、児童の意見を生かしながら、ねらいに向かう授業を行うことができるようにしていくために、授業者が内容項目の理解をいっそう明確にして臨むことが大切であると考える。今後はそのための研修を実践していきたい。

**研究主題 人を繋ぎ、地域を繋ぎ、伝統を繋ぐ学校づくり  
～未来へ地域の歴史や文化を継承する児童の育成～**

**学校名 栃木市立栃木第三小学校  
校長 塩田 裕子**

## 1 研究目的

学区を貫く例幣使街道の歴史や文化を中心に、地域の人的・物的資源が最大限に活用できるよう、地域との協働活動を実施する中で体験や交流の場を多様に設定し、地域への意識を高めたり価値を実感したりすることを通して、地域を大切にし、未来へ歴史や文化を継承しようとする児童を育てる。

## 2 研究内容

### (1) 生活科や総合的な学習

生活科や総合的な学習では、1年から6年までの学習内容を系統立てて単元を構成し、計画的に地域探求学習を織り交ぜながら、各学年の実態に応じた学習を展開している。その中で地域の協力を得ながら、体験活動や発表会を等を地域で実施している。

特に4年生では、発表会後も各施設や商店等の協力のもと商品開発やスタンプラリーを実施するなど、継続した取組になつていて、地域との繋がりが大きい。

### (2) 地域との協働活動

三小祭はPTA・三子連（育成会）・自治会との協働活動で、複数回の会議を実施し、当日は屋外・屋内の活動やお買い物など様々な体験や交流・おはなしの発表等を地域の方々とともに実施



【地域探検】



【子ども例幣使行列】



【総合発表会】



【三小祭】

した。

また、年に2回学校に様々な形で関わってくださっている学校運営協議会委員・ボランティア・交通指導員・各種ボランティアの皆様と教



【顔合わせ会】

職員とで顔合わせ会を実施し、学校や児童のこと等を話し合っている。回を重ねることで、様々な方々の参加があり、教職員との関係性の構築が教育活動へのさらなる支援に繋がっている。

## 3 研究成果

○地域資源を効果的に活用できるよう生活科や総合的な学習を中心に系統性のある取組として計画・実施したことで、児童は段階的に地域への関心・理解を深めることができたとともに、多くの方々との交流や体験を通して人との繋がりや伝統を繋ぐことの大切さを実感することができた。

○テーマに即した学校づくりが促進できるよう教職員と地域の方々との顔合わせ会を実施したり、教育活動内で協働活動を実施したりして、教職員は地域の方々と顔の見える関係性を構築する意義や地域に対する愛着が育まれたと同時に、保護者や地域の方々の参画意識の高揚が見られた。

○6年間を見据えた年間計画が作成できることで、本校の特色ある取組としての定着が図れたとともに、長期的な活動を通しての児童の豊かな心の醸成と教育目標の具現化を目指すことができた。

## 4 今後の課題

○地域の文化や歴史を大切に継承できる児童の育成を図るため、地域と協働した現在の取組を継続したり発展させたりできるよう、人的・物的資源を開発する。

○マネジメントの視点で、取組の質的深化を図る。

**研究主題** 自律的に学ぶ力の育成～シラバスを使っての振り返りとフォーサイト手帳の取組  
**学校または園名** 那須町立那須中学校  
**校長または園長名** 戸村一郎

## 1 研究目的

新学習指導要領で、育成すべき資質・能力の1つに挙げられている「学びに向かう力、人間性等」。変化の激しいこれからの中では、生涯に渡って自律的に学ぶ力がますます重要になる。自律的に学ぶ力を育成するためには、見通し・学び深める・振り返りの3つのステップを循環的に行っていくことが求められる。そのサイクルを確立するためには、どのような取組が有効となるのか。シラバスを使っての振り返りとフォーサイト手帳の取組から探っていく。

## 2 研究内容

### (1) シラバスを使っての振り返り

すべての教科において、タブレット端末でスプレットシートへの振り返りを行い、シラバスとして学校全体で取り組んできた。

シラバスを活用することで、本单元本時の授業の見通しを持つことができ、課題に対してどのように取り組んでいくかを意識し、その方法を習得することで今後の課題に対して解決していくことができるようになる。積み重ねていくことで、主体的に学ぶことができるようになり、学力の定着、向上が期待できる。振り返りは、今日の授業で何がわかったか、分からなかったか、どんな課題にどんな風に向き合ったか、試行錯誤したか、こんな力が必要だと感じたなど具体的に書くことが大切である。

今の自分が、目標や夢に対してどんな位置にいるのか自分で自分を認識すること(俯瞰)ができれば、家庭での学習内容や次の時間への見通しが持てるはずだ。今の自分の立ち位置を

理解するように努めていくことを働きかけてきた。教員には生徒の学びの伴走者として、「○○はできた。△△はできなかった。」だけでなく、「なぜできなかったのか?」と生徒たちにさらに一步踏み込んで振り返りができるような声かけを行ってきた。

### (2) フォーサイト手帳の取組

日々の学習管理能力の向上に向けて、お昼時間を5分短縮し、終学活で手帳を書く時間を10分程度作った。終学活では持ち物や提出物の確認と、「帰宅後～翌朝までにやること」を記入させ、家では手帳を開いてチェックできる状態で管理するように指導してきた。

## 3 研究成果

振り返りに書かれる言葉が、～はできたが、○○はよく理解できない。など、自分の理解度を言語化できるようになった。また、家では～など、授業と家庭学習につながりが見られる生徒が増えた。

また、空き時間をどう活用していくかを考えられるようになった生徒が増えてきた。終学活で手帳を書く時間をしっかり設けたことで、放課後何を勉強するか書けるようになったり、自由時間の使い方も自分で考えるようになったり、一人ひとりの自己管理力が上がっている。

## 4 今後の課題

私たちが教育で目指すのは、教師が言ったからやるのではなく、将来、生徒が自分で考えて判断して、正しい行動をとれる力が身についている生徒を育成することにある。たった5分でも毎時間継続し、単元の振り返りを行うことでメタ認知ができる生徒を育てていきたい。

## 研究主題 明るく、居心地のよい図書室を目指して

～特別支援学校における児童生徒が主体的に本に親しむ環境づくりと

わくわくするような読書活動への取組～

学校または園名 栃木県立足利特別支援学校

校長または園長名 遠藤 洋

### 1 研究目的

本校の図書室は室内が薄暗く、古くて分厚い本がぎっしりと並んでおり、最近の絵本の蔵書もあるが、車椅子の児童生徒にとっては手に取りにくい状況である。図書室が児童生徒にとって、今よりもっと使いやすく、居心地の良い場所になることで、多くの場面での教育的効果が期待できると考え、本研究に取り組んだ。本研究では、本に親しむ環境づくりと活動を通して、主体的に自分で考える児童生徒、もてる力を発揮して生活を楽しめる児童生徒の育成を目指した。さらに、読書活動の充実を通して、地域の教育力を活用した授業づくり、地域、保護者と連携した学校づくりを行うことをねらった。

### 2 研究内容

○図書室リニューアル

図書室リニューアル検討委員会で進め方の検討や共通理解を図った。その後、足特応援センター〈学校支援ボランティア〉の協力をいただき、古い本の処分、書架の移動、展示方法の変更等を行った。

○足特応援センター（学校支援ボランティア）による読み聞かせの充実など活動の工夫



6人の方から計11回の読み聞かせをしていただいた。

昼休みの時間に設定した。事前に告知し、出入りも自由とした。ソファーやマットに寝転がってリラックスして参加する子やマット

に正座し前のめりになって見入る子、車椅子で友達と一緒に活動を感じとっている子など、それぞれの楽しみ方で参加することができた。

○展示の工夫

マガジンラックを1階南北通路に設置し、本の表紙が見えるようにした。車椅子の児童生徒も教室に移動する際に本を目にするよう、また手に取りやすいようにした。

○本に親しむ学習、授業の工夫

児童生徒の主体的な学びを促す取組として、各教員が学習活動に絵本や読書活動を積極的に取り入れた。

### 3 研究成果

足特応援センター（学校支援ボランティア）による読み聞かせでは「楽しかった」

「また、聞きたい」「今度は〇〇を読んでほしい」などの感想があがるなど、楽しく参加することができた。次回の読み聞かせも楽しみにしている様子であった。また、絵本などを活用し読書活動を積極的に行ったことにより、児童生徒の気持ちの表出が豊かになるなど、コミュニケーション力を向上させることができた。

図書室をリニューアルしたこと、授業や昼休みの児童生徒の利用が増えた。また、児童生徒会長が図書室で



のレクリエーション週間を企画するなど、図書室の利用機会も広がった。

### 4 今後の課題

今後も、足特応援センター（学校支援ボランティア）の協力をいただきながら、更に図書室の利用を増やすとともに読書活動を充実させていきたい。